Century Press

ネズミ事師の仕事と生活

世の中、笑って住めば幸いだ

下谷二助

ネズミ事師の仕事と生活

Century Press

著　者　下　谷　二　助

定価 830円

発行者　冨　田　耕　作

発行所 株式会社 情報センター出版局

東京都新宿区四谷2－1
四谷ビル　〒160
電話　東京（358）0231
振替　東京4－46236

落丁本・乱丁本はお取替えいたします
©1983　Nisuke Shimotani
廣済堂印刷
0300－101044－3458

Century Press

ネズミ事師の仕事と生活

下谷 二助

情報センター出版局

ネズミ事師の仕事と生活／目次

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

プロローグ――それは錯覚から始まった……6
第一章　ネの国参上！……15
第二章　ペスト来たりて……39
第三章　怪伝・ネズミ事師（ごとし）……61
第一話　雪の町の桃太郎／62
第二話　金網の天才と呼ばれた男／101

第三話　ネズミ事師たちの夏／135
第四話　ウロチョロウロチョロ／157
第五話　悲しきネズミ博士／187
第六話　涙、涙のネズミ供養／218

第四章　さらば、やさしき人たち……233

あとがき／253

本文イラストレーション／下谷二助

プロローグ——それは錯覚から始まった

ボタンのかけ違いということがある。

よくある錯覚で、これに陥ると最後のボタンをはめる段にならないと、自分の間違いに気づかない。ひどくボンヤリしていたりすると、最後のボタンをはめても、まだその過ちに気がつかず、みっともない格好で街中に出かけて、「あなた、ボタンのかけ方がおかしいですよ」などと注意されて、初めて失態に気づくことになる。

つまり、錯覚とは遅かれ早かれ、その事実にいずれ気づいて、「ああ、思い違いしちゃった」とか「錯覚なさってましたね……」などということで、自覚的にも他覚的にも〝錯覚〟が発覚するものである。

ふつうの場合、錯覚はそう長続きはしないのであるが、しかし、それはあくまでも錯覚するものが少数で、多くのものが正覚であるという前提があっての話である。

だからたとえば、この多者と少者の関係が逆転したとしたらたいへんだ。錯覚が発覚する機会を失ってしまうことになる。

こと、それがボタンのかけ違い程度のことなら笑ってすまされるが、いざ人類の命運にかかわるような錯覚だとしたら、これは空恐ろしい問題といえるのである。そして人類はその恐ろしい錯覚をしていないという保証はない。

さて、それほどまでに錯覚に対して神経質に気をつかっているぼくが、一〇年ほど前から始めたのが、鍋、釜、バケツといったたぐいの雑貨のコレクションだった。

こともあろうに雑貨のコレクションとは、またなんと風変わりな、なにか錯覚でもしているんじゃなかろうか、などという周囲の声もなくはなかった。

たしかに、そんなふうに言われれば、もろもろの雑貨には、ことさら工芸的な価値があるわけでもなく、ましてや造形美といったものもない。それどころか、どうしてこんなトンチンカンなものを作ってしまったのだろうかと思うほどに、使い勝手の悪い、稚拙な作りの雑貨もある。

しかし、それらが稚拙で、不出来な雑貨であればあるほどに、量産されたモダンリビング用品などにはない、人間の虚飾のない温もりが感じられ、ぼくにとってはそれがたまらない魅力だったのである。

ぼくは旅の折り折りに珍しい雑貨を持ち帰るようになった。そして雑貨のコレクションが数を増すにしたがって、雑貨に対する愛着はつのり、やがて珍しい雑貨を求めて旅に出かけるようになった。見知らぬ国に出かけ、珍しい雑貨に出会えたときの胸のたかまりは、なんともいえないものである。そしてその珍しい雑貨のなかの雄は、これはなんといってもネズミ捕り器であった

というわけだ。

実際、ネズミ捕り器ほど各地各様の型状をおびた雑貨はほかにない。ぼくの手もとには、西はポルトガルから、東はアジアまで、一〇〇点をはるかに超えるネズミ捕り器があるが、どれもが、それを買い求めた土地それぞれの民族、宗教、文化、はてはその国の経済力までを正直に映し出していて、眺めているといい気分なのである。

年老いたモノ

さて、そんなふうに集められた数多くのネズミ捕り器は、ぼくの仕事場に積みあげられ、さながらぼくは、物置小屋の中にいるような気分である。

しかしまあ、ネズミ捕り器に限らず、数多くの素朴な雑貨たちというのは、今日の一般的な生活感覚の中ではどれもこれも古くさく、ときには用済みになった役立たずの老人のような気配さえ感じさせるのだけれど、この〝物〟でありながらまるで生きもののように〝年老いてしまった〟という印象はいったいどうしたことなのだろうか。

おそらくそれらは初めてこの世に登場してきたときは、ずいぶん便利なものができたものだと歓迎され、重宝がられたものだったはずだ。それが、何十年かの歳月を経ると、まるで生きものように老化して、〝役立たず〟といった役割をふり当てられてしまう。生きものなら、それまでの過去の時間も考慮されるのに、生きものでない〝物〟にはそんな考慮もされない。

ぼくは思うのだけれど、この〝物が老いる〟というふうに感じることこそ、実は人間のある重大な錯覚ではなかろうかと……。

そんなことを考えながら、数多くのネズミ捕り器の山を眺めていると、その年老いた彼らが、何かぼくに訴えかけているような気さえしてくるのである。

「あんたもまた、酔狂なオヒトだね、ワタシらなんぞ、お払い箱になりかかったネズミ捕り器を集めたりして……、同じ集めるなら、もそっとましなものがあるざんしょ」

「いや、まあ……。しかしお払い箱なんていっても、まだまだアジアのほうじゃたいした活躍ぶりじゃないですか」

「なあに、時間のモンダイざんしょ、いずれ、あんな状態は長くは続きはしまい、いわばイタチの最後っぺみてえなもんざんしょ」

「そうですかねえ」

「そうですかねえって、テメエたちのことだものワタシらがいちばんようくわかってますよ。いざこんな時代になってみると、はるか昔の、ワタシらがこの世に誕生したころがやけに懐かしい。あのころはよかった。時代の花形だ、ヒーローだ、なんてもてはやされてねえ」

「そういうあなたたちネズミ捕り器がこの世に誕生したのはいつごろのことなんですか」

「そうだな、いまさらそんなことを聞かれても始まりゃしねえが、ま、二〇〇年かそこらという勘定になるかなあ。たしか、ありゃあんた、産業革命のあとだったはずよ。ほら、ワタシら鉄と

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

かバネがねえとできねえざんしょ。あのころはずいぶんと能率のいいもんができたって、そりゃ評判をとったものよ。それから一〇〇年間は、いや一〇〇年どころじゃあねえ、ついこの二、三〇年前までは、これで結構役に立つなんていわれて、これっぽっちも年寄り扱いなんかされたことはなかった。いやまったく、まさかあっしらが老いぼれるなんてことは、つゆぞ考えもしなかったことでしたね。どうしてこんなことになっちまったのか。

古くて役に立たねえって、ワタシらを見限って、人間たちはいったいどこへ行こうとしてるんですかねえ。シモタニさん、わかりますう？」

——とまあ、そんなことを喋っているような気がするのである。

たしかに人間は、いったいどこへ行こうとしているのか、この年老いた雑貨・ネズミ捕り器のなかには、なんだかたいへんな命題が潜んでいるように思えてくるのだ。

と、そんなことを考えていたある日、ぼくのコレクションのなかに、日本のネズミ捕り器がひとつもないのに気がついた。これは片手落ちだった。どうもぼくに限らず日本人が何かを始めるときには、足もとを忘れて、つい海のむこうに目がいってしまう。この西を見るクセというのは不思議な民族的習性だなあ、などと妙な反省心にとりつかれながら、ぼくは日本のネズミ捕り器事情について遅ればせの研究を一昨年あたりから開始した。北は北海道、南は沖縄まで津々浦々を訪ねて、とまではいかないけれど、まあぼくなりに飛び回ってみたのだ。

あったあった。はたして日本にもネズミ捕り器は売られていたのである。

しかし、あることはあったが、そのあり方には多少モンダイがあった。
たとえば、荒物屋さんを見つけて、
「おばさん、ネズミ捕り器ありますか」
と訊くと、
「ネズミ捕り？　ああ、あれねえ、あれあれ、たしかあったはずだけど、あれ、どこへしまっちゃったかねえ」
などと店の棚の上から陳列台の下までかき回して、あげくのはてに埃のつもったネズミ捕り器をひっぱり出し、パンパンとはたきながら、
「はいありましたよ。このことでしょ」
とにべもないのだ。愛情も、商品に対するいつくしみもない。まるでゴミの中からでもひっぱり出したかのようなしぐさである。
「そうそれです。あってよかった。それいくらですか（どうせあんたにはゴミでしょ、タダでいいよね）」
「ええと、そうねえ、たしかこれ二五〇円だったかしら。あら、ここんとこに値段がはってあるわ。ほら、うすくなってよく見えないけど、ほら、やっぱり二五〇円ね」
とぼくに確認させるのである。そこでぼくがポケットから二五〇円さしだすと、
「これはたしか三、四年前の値段だから、ほんとはもうすこし高くなっているはずなんだけど、

ま、いいわ、お客さんハンサムだから、おまけしちゃう……」

などと言ったりするのである。商魂たくましいおばさんにくらべて、このネズミ捕り器の店頭でのあり方は、これは実にもう心細さを通りこしてあわれというしかないあり方だったのである。

それでもとにかく、ぼくにこんな苦労をさせながらも、日本のネズミ捕り器はぼくの手もとに集まりだした。しかし、集まりだした当初、ぼくをとらえた不思議な疑念は、集まりに集まってゆくにしたがってどんどん大きくなっていったのである。

こう書いても、読者の方にはなんのことかわからないだろうけれど、つまり、板のネズミ捕り器にしても、籠型のネズミ捕り器にしても、日本のネズミ捕り器はどこの地方で買ってもほとんど同じで、変化らしきものがないのである。

たとえば、北海道の小樽の町と、沖縄・那覇の町で手に入れたネズミ板は寸分違わなかった。これは世界各地で手に入れたものが千変万化に富んでいたのにくらべて、実に意外なことだった。日本のその他の地方で買ったものも事情はほとんど同じで、たとえわずかな違いが認められることがあっても、それはせいぜいラベルの色の違いであったり、マークの違いくらい。形状や機能面の違いは皆無、まったく同じといってもさしつかえないぐらいにそっくりだったのである。

ま、島国、単一民族の日本のことであるから一種類の形状・機能というのは考えられないこともないのだけれど、ぼくにはちょっとしたひっかかりを見せたのである。そこでその違いを子細

に検討してみた。

まず板式のネズミ捕り器であるが、唯一の相違点であるラベルですら違いというより共通の部分のほうがはるかに多い（はじめぼくはその違いを同一製造所で作られたものの、製作年度の違いによる、いわばラベルのモデルチェンジぐらいに思ったほどである）。

ラベルのサイズはどれもこれもほぼ六センチ×七センチぐらいと、見た目には同じ。三本の平行線で枠取りされたふち飾りもまったく同じ。さらに中央にネズミ捕り器を前にしたネズミの絵が描かれているのだけれど、これがまたほとんど同じ。まるで同じ絵に薄紙でも当てて写し描いたように似ているのであった。

一方、金網製のネズミ捕り器のほうも同様、変化らしい変化は見られない。

（おそらく、それぞれのネズミ捕り器は、どこか限られた地方の限られた場所で細々と作られているに違いない）

と、ぼくにはこんなふうな目星がついた。

それはつまり、かつてはそれなりに全国各地で作られていたであろうネズミ捕り器が、需要がとぼしくなるにつれ、産業として徐々に斜陽化してしまって、どこかの地場産業がかろうじて一カ所生き残り、細々とネズミ捕り器の生産を続けているのではなかろうかということだ。

これはきっと、日本のネズミ捕り器産業はそう長くはないのかもしれない。ネズミ捕り器研究家としてのぼくが、遅まきながらもこの時期に気がついてほんとうによかった。もしこのまま気

づかずにネズミ捕り器産業が絶滅でもしてしまったら、死んだ母に申し訳がたたない、などと、ドッと冷たい汗が吹き出したのだった。

いま、人々の生活の中から忘れ去られていこうとしているネズミ捕り器、そしてそれらをいまなお作り続ける人たちがいる。

これこそ、いまの日本に失われつつある懐かしくも哀しい、人々のロマンの正体ではあるまいか？

これは一刻も早くその地場産業を訪ねてみなければなるまい。そしてネズミ捕り器に関わった人たちの生（ナマ）の声を聞いておく必要がある。正直、そう思ったのである。

第一章　ネの国参上！

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.